2023 年 2 月 5 日午前 10 時 30 分
降誕節第７主日　主日礼拝
司会　深町　穣
奏楽　川名ひさ子

讃美歌・詩編交読・信仰告白では起立をしますが、お立ちになりにくい方は、座ったままでどうぞ。

（平和のあいさつ）
前　奏
招きのことば　ゼカリア書 14:6-9a
讃美歌　12(1, 3, 4)「とうときわが神よ」　一　同
詩編交読　147:1-11(P. 164/160)　一　同

祈　り　司会者
≪関東教区お祈りカレンダー≫
三芳教会　所沢武蔵野教会　所沢みくに教会
（主の祈り）

讃美歌　53「神のみ言葉は」　一　同

聖　書　旧約　箴言 3:1-8(P. 993)
新約　ルカ 8:4-8(P. 118)

メッセージ　『実りをもたらす良い地』
祈　り　川上 盾 牧師

讃美歌　412「昔 主イエスの」　一　同
献　金　一　同
（献金感謝の祈り）

信仰告白（ドイツの教会の信仰告白）　一　同
頌　栄　24「たたえよ主の民」
派遣・祝祷　川上 盾 牧師
後　奏
報告・紹介

＜２月 招きのことば＞ゼカリア書 14:6-9a
その日には、光がなく、冷えて、凍てつくばかりである。しかし、ただひとつの日が来る。その日は、主にのみ知られている。そのときは昼もなければ、夜もなく、夕べになっても光がある。その日、エルサレムから命の水が湧き出で、半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい、夏も冬も流れ続ける。主は地上をすべて治める王となられる。

≪2月礼拝当番≫　植松みよ　徳江由利
大倉武子　大川原恵子
猿谷富子　村上直子

≪今週の集会・行事≫
◎ 本日礼拝後　２月定例役員会
◎ 7 日(火) 牧師、上毛愛隣社理事会
◎ 9 日の紅雲町家庭集会はありません
◎ 10 日(金) 10:00　会堂清掃 C 組
◎ 10 日(金) 午後　地区婦人会顔合わせ(当教会)

≪次週の主日≫
◎ ＣＳ朝礼拝
◎ 主日礼拝　10:30
メッセージ『重荷を負う者と共に』川上盾 牧師
聖書：旧約　ヨブ記 2:1-10(P. 776)
新約　ルカ 5:12-16(P. 110)
讃美歌：13(1, 3, 5)，354，432，25
交読詩編　103:1-13(P. 115/111)
司会：服部直子　奏楽：徳江由利
◎ 教会報委員会　礼拝後

≪予　告≫
◎ 2/22(水)　灰の水曜日（レントに入る）
◎ 2/26(日)　レント第一主日礼拝（聖餐式）

≪報　告≫
◎２月に入りました。
１年で最も寒い季節です。コロナウイルス感染に加え、インフルエンザの感染も心配されます。気をつけてお過ごし下さい。感染の心配な方、体調の悪い方は無理をせず、家庭礼拝・オンライン礼拝をおささげ下さい。礼拝に参加された方も、帰られたら手洗い・うがいを忘れないようにしましょう。

◎ ２・１１『信教の自由を守る日』
今週迎える２月 11 日は、日本の暦では『建国記念日』として休日になっています。しかし戦前は『紀元節』(日本の神話に基づく建国の日)とされ、天皇中心国家による軍国主義の象徴的な日でした。戦争や国家の方針に反対する人々には弾圧が加えられ、日本基督教団でもホーリネス教会(旧６部･９部)の人々が弾圧を受けました。天皇を神と認めず「天皇も神のさばきのもとに置かれている」と語ったからです。戦後、教団ではこの日を「信教の自由を守る日」と称し、単なる祝日とは異なる受けとめ方をしてきました。いま日本の政府は軍備を強化しようとしています。無関心に過ごしていると、気付いたら日本が戦争を再び始める国になるかも知れません。平和を願う日として「2. 11.」を過ごしましょう。
（なお、例年この日には市民集会が開催されてきましたが、現時点でまだ案内は届いていません。）

≪先週の集会≫

	礼拝堂		オンライン	献　金
主 日 礼 拝	48		28	31,721
	昼(	夜	計	
聖研祈祷会	6	5	11	

《メッセージ》『たとえ塔は崩れても』川上 盾 牧師
ハガイ 2:1-9, ルカ 21:5-9（1 月 29 日）
▼古代より人間は神への信仰心を表すために壮大な建築物を築いてきた。聖書の民・イスラエルにとって、それは何といってもエルサレムの神殿であった。最初の神殿を築いたのはソロモン。イスラエルがもっとも繁栄を極めた時代のことである。しかしその神殿もバビロン捕囚の時代に破壊されてしまう。信仰心を打ち砕くことが、人々を従わせる最も効果的な方法であることをバビロニアの権力者は熟知していたのだろう。▼その廃墟となった神殿を再建したのがハガイ、セルバベル、ヨシュアである。再建された神殿は「第２神殿」と呼ばれた。捕囚から解放されたとはいえ、まだまだ大きな喪失感の中にあった人々。「こんな時にとても神殿再建なんて無理、まずは生活を立て直さないと…」と絶望感に沈んでいた人々に、ハガイは「自分たちは板の家に住んでおきながら、神殿を廃墟のままにしていていいのか」と叱咤した。「こんな時だからこそ祈りの家が必要だ！」と。こうして再建された第２神殿、ソロモンの神殿よりは質素だったが、人々の心の支えとなったことだろう。▼そんな風に、人々の祈る心・信じる心を導いた神殿であったが、イエスの時代には形骸化した宗教のシンボルのような場所となってしまっていた。イエスの時代の神殿はヘロデ大王が増築した「ヘロデ神殿」。ローマ風に絢爛豪華な装飾を施した壮麗な建物だったという。▼しかしその神殿を中心とする宗教情勢は、人々が見栄を張り合い、金持ちやエリートが自分のステイタス・プライドを誇り合うような場所となり果てていた。裏では祭司・長老たちがヘロデと結託し不当な利益を貪っていたのだろう。その神殿のあり方にイエスが怒りを表したのが「宮清め」の出来事である。▼弟子たちはそこで一度、神殿に対するイエスの批判的な振る舞いを見たはずだ。ところがその後、再び神殿を訪れた際に「何と見事な建物だろう」と感激してしまったのだ。それに対してイエスは言われた。「この豪華な神殿の石もいつかは崩れ去る。人の手によって造られたものは永遠ではない」と。弟子たちが「いつそのようなことが起こりますか」と問うたのに対して、イエスは世の終わりの出来事について長い教えを語られた(ルカ 21:8-33)。▼「人の手で造ったものは、いつかは崩れ去る」…そのように言い切ってしまうと、歴代の信者たちが築いた建物に込められた信仰が否定されているように思える。イエスは決してその信仰を否定されたのではない。しかし、どんなに信仰が込められていようと、人が造ったものは永遠ではないということは真実である。▼「それでは空しくなる」と思う人もいるかも知れない。いいえ、決して空しくはありません。「天地は滅びるが私の言葉は決して滅びない」(ルカ 21:33) というイエスの言葉を知っているから、信じているからである。「たとえ塔は崩れても、主の教会から鐘はなお響く。」(讃美歌 21-400)